登場人物（登場人物の服装はラストの男の服を除いて全て白と黒、もしくは灰色で統一）
男
他人
先生
医者1.2.3
母親
娘
祈祷師
子分

セミがよく鳴いている夏のあつそうな日に男がベンチに座って本を読んでいる。（ベンチにだけサスを当てる）
表紙はお客さんには見えないが、仰々しい洋書であるのは見て取れる。
男が汗を拭いながら読んでいるが次第に貧乏ゆすりをしたり盛んに姿勢を変えたりし明らかに男の集中が途切れていく。
それと並行してBGMの蝉の鳴き声を次第に大きくなっていき（この間に少しずつ笑い声のBGMを入れておく）しまいに洋書から目を離し男のベンチの下に置いているバッグに本をしまう、そしてバッグからスマホを取り出し、呆然とした様子でスマホを取り出しスワイプしている。そんな中ふと男はスマホからも目を離し、いつの間にか自分を囲んでいた蝉の声が人の笑い声に変わっていることに気づく。
男はサッと首を振って右の木に目をやるが、（右の木にサスを当てる）
その時には笑い声はピタリと止み、セミがただそこに居て遅れて蝉の声が聞こえる。
男は不審に思うが次第に目を木から手元のスマホに戻す。
そうするとまた笑い声が聞こえ始めて今度は左の木に目をやると（左の木にサスを当てる、ひときわ大きく様々な人の大きな笑い声を流す）
木には笑っている下手くそな口の絵がベタベタと樹液を吸うかのように貼られていた。
男「またか..まだ俺は治っていなかったのか？.....」
そういうとスマホをポケットに仕舞い、バッグを背負い上げ
男「逃げなきゃ、逃げなきゃ俺はまた...」
そうつぶやいていると上手から他人が歩いてくるので
男は他人に話しかけ
男「すいません、ここの近くに医者は、いやクスリだけでも、クスリだけでも！どこにあるのか知りませんか！？」
男は思わず大声を上げ、他人をそれに驚き、小さく低い声で一言
他人「あっ...」そう言って男に構わず道を速歩きで通り過ぎ下手に消える
男は未練がましい表情をして下手のほうに二三歩近寄るが他人にわざわざ話しかけたり、追ったりはしない
男は落胆して下を向くと下手の方に脱皮に失敗したセミの死体を発見する。
その死体をつまみ上げて
男「セミか、未熟児か...」哀れむような目を向けたかと思うと、そのセミを地面に叩きつけ
男「お前のせいで！おまえのせいで！馬鹿にしゃがって！いじめやがって！この！この！この！...」
と言ってセミを何度も激しく踏みつけ、終いには息切れをしながら
男「ああ、どうしよう。私を治す医者はいないのか？そういえば、この辺に先生の医学部が...遺憾ではあるが、まぁ大丈夫か...大丈夫かな？大丈夫だろう。そうに違いない。」

早口でつぶやきながらそうして男は道を歩いた。だが、道の真ん中で歩くモーションだけはしているのだが一向に体は前に進まない。（その間に木を裏方の人間が片付ける。）30秒ほど続けたかと思うと急に客席の方を向いて
男「なに見てんだ…なにがおかしくて笑ってんだお前らは！！そんなに俺がおかしいか！ええ！お前達だっておかしいんだからな！お前達だって！」
この男が台詞を発した時にピタリと笑い声のBGMが止まる。
と院長が「おつかれ」と下手から声が飛び、下手から先生が出てくる。
男「先生！」
先生「久々じゃないか。どうした」
男「先生、僕はやっぱり治療が必要なんです」
先生「またかね」
男「またなんです」
先生「うむ….じゃあ、分かった。君の気まぐれに付き合おう。」
男「ありがとうございます！」
そう男が言ったかと思うと、医者1.2.3がやってきて
1「だれー？患者さんー？」
2「じゃあお熱測ってあげましょうねー」と2は男の脇に無理やり体温計を差し込もうとする。
3「胸を測って上げましょうねー、ほら万歳、万歳して」と医者1が聴診器を構えて、医者3が男を両腕を掴もうとするのを男は払い除けて
「何なんだ。お前たちは！？医者か！？それともお医者さんごっこか！？」
2「へんなのー？」
1「この患者さんおかしいね」
3「なにやったの？人殺し陰口意気地なし？」
男「なわけ無いだろ！」
男がそう怒鳴ると医者たちは一瞬黙ったかと思うと
3「お医者さんごっこになにムキになってんのさぁ」
2「滑稽滑稽！！」
1「被害妄想！！被害妄想！！」
ぎゃはハッはあはははっアッハはあっはっはははははと男を囲みながら笑う
男は倒れ込む
男「やめてくれ悪かった。自分が悪かった。それはそうなんだ。それも事実なんだ。
だけど自分は….」
男が目をつぶってそう言ってる間に医者たちはハケる
先生「やはりそうなると思ったよ。」
そう言って下手から先生が出てくる
男「先生！」
先生「君も本当は分かっていただろうに。」
男「なんですアレ。あんなのお医者さんごっこでしょう。」
先生「それは君の主観でそう見えてるだけで皆そんなもんだ
そもそも君だって本当はごっこ遊びやっていたんだよ？知ってたか？」
男「….」
先生「とにかく、ここでは君を直せないし居場所もない。」
男「そんな。」
先生「もっともあれが医学部というものの本質かもしれないが、」
男「それじゃあ、一体医学部は誰のために」
先生「そりゃ君、自分のためにあるに決まっているんだろう。君は勘違いしているよ
患者を助けるために医者はいるというのは旧時代の価値観だよ。現代では
医者は医者を助けるためにあるんだ。」

男「そんなことおかしいでしょ！」
先生「チッチッチッ、バカだね君も。考えてみたまえ、傷を癒し痛みを誤魔化す術を持っているならどこぞの知らない人ではなく。まずは自分、その次に仲間内に術を使うのが人間のサガというものだよ」
男「でも僕は…どうしたら」
先生「他をあたってくれ。どこへでも行き給え。それこそ本物の病院に行ってはどうだね？」
男「それは、嫌です」
先生「なぜだね。私の友人の一人に救急車の運転手をやってる男がいるんだ。そいつから、」
男「そしたら僕は僕じゃなくなります！」
先生「そんなの行ってみないとわからないだろう？不安なんか知らずに安泰に暮らせるぞ」
男「安泰なんか嫌いだ！」
先生「では治療など望むな！」
男「もういい！…僕一人で直します。そうだ図書館に行こう。あそこなら私を満たせるはずだ、そこで自分を自分で直して見せる。」
先生「勝手にしたまえ君の目は既におかしくなって..」
裏方「道具通りまーす」と裏方が先生の台詞の途中で声をかけ、先生は下手へハケる。
喋っているうちに裏方が本棚（2体を舞台の奥手に置く）を移動させて場所が図書館へと移っている。
男「ああはいったが、自分を直すにはなんの本を読めば良いんだ？」
男を後ろの本棚を舐めるように確認する
男「本当にここは図書館か？本が馬鹿に少ないな、運搬しやすくするためかな。
予算ケチりやがってこれだから… 」
とブツブツつぶやいていると、親子連れがやってくる
娘「ママ！ジャンプしたい！ジャンプしたぁい！」
母「ここでやっちゃダメですよ」
娘「やだぁ！やぁだ！」
娘飛び跳ねて、床をドンドンと打ち鳴らして動き回る
娘「アイスクリーム食べたい！」と叫ぶので
男「うるさい！」と男怒鳴って後に男は娘近寄り
男「幼女みたいな喋り方しやがって!!ええ！ベタベタメイクしやがって、そんなに体の大きい幼女がいるか！」
そんな話を男がしている間に母親は眼薬を打って、涙が流れたように見せながら
母親「娘になんてこと言うんですか！！」
男「あんたの娘が騒ぐからだ」
男の発言を遮って母親は怒鳴る
母親「あんたみたいな不審者が要るからでしょうが！！うちのコの声よりアナタの声がのほうがうるさい！！」
母親の気迫と声に押されて男
母親「まだこんな子供に図書館で怒鳴って、アナタこそいい迷惑です。アナタは気が狂っている！！」
と言って泣いている娘を連れて下手にはける
男「畜生め！俺は正しいことをしただけなのに。なんだあのケバケバした親子は気持ち悪い…大体あんな異常者が図書館に来るんじゃないんだ。そうだ自分の言いたいことばかり嫌がって。自分は悪くないんだ。そうだ、俺は悪くない。俺は悪く…」
男の台詞の途中から先程の他人が下手より舞台から出ていて男を露骨に不審そうに見ている。
男は他人に気付き思わず睨みつけ、他人は目をそらそうとして速歩きで上手へとハケる
男は大きい舌打ちするが、徐々に表情から苛立ちが抜けていく。

男「おれはどうしてまともにいられないんだろう。なんで迷惑をかけないと自分を出せないんだろ。なんでいつも怒ってるんだろう…」
思わず男が下を向いてすすり泣きを始めると本棚の後ろから、
祈祷師「別にいいじゃん」
ムチ持ち祈祷師とその子分が後ろについて舞台の前に出てくる。
男「なんですかアナタは？」
祈祷師「祈祷師だよ」
男「祈祷師かぁ」
祈祷師「あんさぁ君、深刻に考えすぎ」
男「といいますと」
祈祷師「人から嫌われない人間なんていないし、迷惑をかけてない人間なんていないんだから。それで失敗するのも仕方ないんだからさぁ」
男「それでも自分を直したいんですよ」
祈祷師「直さなくてええやん。いいか人類は80億人もいて、ほんでメキメキ人は増えるしメキメキ人は減る。多少のやつから嫌われたからってなんや」
男「確かに…言われたらそうかも知れない。」
祈祷師「天才ほど凡人から嫌われるんだよ。それより俺の子分にならんか？」
男「なります。だから僕のことを治してください！」
祈祷師「よし良いだろう。こいつも俺の子分だから。おい、お前（子分に向かって）色々教えてやれよ」
子分「ハイッ！」
と言って子分は男に近寄り
子分「よろしくっ」と男の耳元で言う
男「うん！ではまずは祈祷をやってみてください！」
祈祷師「まぁ焦るな。俺の舞や祝詞を映像に撮らなきゃもったいない。お前の教材にならないだろう。とりあえず、おいお前（子分に）！カメラもってこい」
祈祷師はムチをピシャリと振るい床に打ち付ける
子分「ハイッ！」
子分下手へとはける
祈祷師「アイツを見習えよ。アイツが俺の子分やから」
男「はい！じゃあ僕はなにをすれば」
祈祷師「そうだなぁ、じゃあコーラ買ってきてくれる？」
男「ハイッ！」
男は上手へと走ってはける
祈祷師「駒が多いと便利だ。」
と下手から子分がカメラと三脚を抱えてやってくる
子分「持ってきました！前から注文通り、ソニーとパナソニックの7:3の黄金比ブレンド
有効画素数はアナタのお望みの数の三乗の数、おまけにアル中安心手ブレ補正付き！」
と子分は説明しながら祈祷師がカメラに夢中になっている隙に祈祷師の尻ポケットの財布を盗む。
祈祷師「ええやぁん！最高やん、素敵やん！」
子分「これ、10分割払いでした。」
と上手から男が走ってきて
男「コーラ買ってきまっ、」
と男は転んでコーラをカメラにこぼしてしまう
祈祷師「あっ！」
男「すいません、悪気はなくて」

祈祷師「（舌打ち）マジでもうッ！（ムチを男に振るう）あのさ、君さ、だから周りから気狂い扱いされるんじゃないの、（ムチを男に振るう）あのねそんなんだから君の人生上手く行かないんじゃない？（ムチを男に振るう）そんなんだから俺以外から相手にされないんじゃない！？」
男「すいません…」
祈祷師「君、多分施設で暮らしたほうがいいよ。このままじゃ社会でやってけないから」
祈祷師はハンカチを取り出してカメラを持って下手へはける
男は落ち込んでうつむいているが、後ろから肩を子分がぽんと叩く
子分「大丈夫ー？痛かったろ。」
男「いやでも、僕が悪いから」
子分「いやいや、お前悪くないから、気にすんな。いやアイツマジキモいよな。」
男「そう？」
子分「いやそうだよー。絶対自分のこと才能あるって思ってるよアイツ。マジでナルシスト。俺はもう立派に祈祷が出来るのに」
男「じゃあ、僕の事治してよ」
一瞬子分と男の間に沈黙
子分「…あー、今、タイミングがなんかこう（もたもたハンドサインを繕う）びみょいかも」
男「え？びみょいってなに、タイミングって何？」
子分「いやいや祈祷はさ、アレだよ。そんなものだよ。それ言ったらアイツだってほら祈祷の度に映像にしなきゃ気がすまないし、絶対自分のことカッコいいって思ってるよ。マジナルシ。しかもアイツは…」（途中からやたら早口）
男「あ！あの人が来た！」
子分「本棚の後ろに隠れよう。」
男と子分を本棚の後ろに隠れる。
祈祷師は舞台の前で何か探し物を必死にしている。
子分「アイツの財布スッといたんだ。見ろよあの馬鹿面」（財布をポッケから取り出す）
子分がクスクスと意地悪く笑うのを見て、男もあわせて笑う。
祈祷師は男たちに気付かず、探すことに疲れ果ててその場に座り込む。
それを見て子分はいっそう笑い声を大きくしていく
男もそれにあわせて笑いを大きくしていく
と唐突に
男「あっ」とつぶやく、その瞬間大音量でセミの声が流れる。
子分は男に笑いながら話しかけているようだが、声は出ずに、セミの声が子分の口の動きに被さりセミの声で喋っているように聞こえる。男は耳を抑えて舞台の真ん中に飛び出し
男「ちがう！違う！俺は悪くない！俺は悪くない！普通をやろうとしただけなんだ。
これが普通だと思ったんだ。俺は！俺は！」
（その後はサイレント映画のように）
男は耳を抑えて舞台の真ん中に飛び出しと子分も追って本棚から出てくる
祈祷師は最初に男に驚きながらも心配そうに近寄り、声をかけようとするが
子分の手に持っている財布に気づく。
祈祷師は子分の胸ぐらを掴み上手に引き寄せて、祈祷師は怒鳴り、子分は言い訳している様子だが声は出ず、セミの声が流れる。子分は男に助けを求めるように手を伸ばすが
それを無視して男は下手へ逃げてはける
男は下手へ逃げてはける
暗転
すると祈祷師たちもハケて、蝉の声も止まる
（祈祷師達はハケる際に新聞を落としていく）

照明も少し落とし役者の顔がなんとか見える暗い中
男は疲労困憊した様子で下手から出てくる
男「（息切れ）少し、少しでいいから休もう。休まなきゃ....」
そう言って舞台の真ん中に座り込む
出来る限り客席に目を向けないよう下を向いて横になる
横になると、アタマの感触で新聞に気づく。
新聞を手に取り姿勢を直してあぐらをかいて読み始める。
男「公園や図書館で人に大声で怒鳴りつけたり、つぶやきながら歩く男が出没中、やたら息を荒くし他人の目をじっと睨みながら話しかけてくるので不快通り越して恐怖...」
男は不機嫌そうにそのページを乱暴にめくる。
男「図書館で子供を連れて遊びに行ったら、子供が図書館で騒いだと言うだけで知らない男から怒鳴られた。子供が騒ぐなんて当たり前なのに。しかも自分も大声を出しているのに注意するというのははっきりいって異常です。通報しようか悩みましたが、子供から引き止められたのでやめました。優しい子です。ちなみにその男の見た目の特徴は、」
男はまた不機嫌そうにそのページを乱暴にめくる
男「今日午後2時頃図書館で、ある祈祷師がその祈祷師の子分が男の財布を盗んだことがきっかけにその子分といざこざになり、殺害。その祈祷師は文化庁から文化勲章が予定されていたほどの権威的存在で、今回の事件は誠に無念である...」
思わず男は新聞を床に叩きつけるが、一枚が手に張り付いて上手く取れない。
その新聞を最初は比較的落ち着いて取ろうとするが、上手く取れない。
終いには声を上げながら無様に新聞をバラバラにちぎる。
新聞が紙くずになった後も男は呆然と立って息を荒げていたが、男が我に返ると自分の手が震えている事に気づいて目を見開く。そして客席に目をやる。客席をの方を見回し怯えてように舞台の奥へと落とずさり、へたり込む。
男「ああ、ああ何なんだ。もがけばもがくほど悪化してく。自分が悪いのか？周りが悪いのか？両方悪いのか？俺だってまともになりたいのに...でもまともになりきるのも怖い。他人と関わろうとはしてる。でも陰口は溢れている。どうでもいい人に対して熱くなって噛みついて、自分にとって頼りになる人も助けてくれる人にも噛みついて。堪え性がないからか。そうか他人はいつも堪えているのかな自分に対しても。

いつからなんだろう、いつからこうなったんなんだろう。
（子どものように泣きじゃくる）パパー！パパー！物覚えが悪くても、要領が悪くても自分をバカにしてほしくなかったし、ため息もついてほしくなかった！
ママー！ママー！頑張って勉強したよ！たくさん本も読んだよ。でも自分の被害妄想と自意識過剰は治らなかったよ！
一体どこまでが自分の自意識なんだろう。.....いやまてよ。本当は自分は本気で自分をかえようとしなかったんじゃないか。そうだ、俺は俺自身に対して「お医者さんごっこ」をしていたんだ。なぁんだそうか、くっだらない！くくく、ahahahahahahahahahahahaha....」
暗転
舞台上にはまだ誰もおらず、コオロギの鳴き声が流れている。
袖で先生が
先生「ああ、そうですか、彼の状態が安定しているなら何よりです。」
と言って舞台奥の下手から出てくる。
先生「ここなら彼も不安になることは無いだろう。」
そう言うと男は無表情で下手から出てきて
青い縞々の病院服を着てラジオ体操を始める
そして医者達が下手から舞台上に男より舞台奥に出てきて歩いてくる。
医者たちは先ほどとは違ってとても落ち着いて医者らしくしている。

上手から祈祷師と子分、図書館の親子、冒頭の他人がまた患者として男より舞台奥に出てきて
それぞれ医者と話し、症状を話しているようだった。
一見とてもよくある病院のようだったしかし、男が体操の過程で後ろや下を向くと
その隙に医者は表情を突然崩し、嘲笑するように男を見、
男が前を向くとふっと顔を戻し、先ほど通り会話をする。
そしてまた後ろを向くと
またその隙に医者は表情を突然崩し、嘲笑するように男を見、
そしてまた…（体操終わるまで繰り返し）
男が体操を終えてふと後ろを向くと、男以外のキャラクター全員が腹を抱えて笑っている。
思わず男はギョッとして前を向き直し、そして後ろを向くと
その時には笑いは止まっている。
安心して男が前を向くとまた後ろのキャラクター全員は笑うが
今度は男も耳を抑えて目をつぶって大声で笑いだし
男「あはははははははははははははははははははははっはあああああああ….」
と笑いながらまたラジオ体操のBGMが流れ始め、舞台の幕は降りていく。